

# スクール・カウンセラーの相談活動に関する一考察

## — 不登校生徒とその保護者との交流経験から —

藤 土 圭 三

### はじめに

文部省のスクール・カウンセラー活用調査研究委託事業に参加し、スクール・カウンセラーとして公立中学校に勤務した。具体的には6月から翌年3月まで週一回(8時間勤務)の割合で、出張相談を実施した。

村山正治(2001)は文部省のスクール・カウンセラー(SC)事業について「聖域視されていた公教育の現場に教育改革の一環として外部の専門家(臨床心理士)を投入し、教師と連携しながら児童・生徒に役立つ援助をするという画期的な事業」であると言う。SC事業は平成7年度に154校でスタートし、平成12年度末で2250校に達し、大きな足跡を残して終結した。村山は7年間の調査研究事業の成果を以下のように概観する(村山2001)。

- (1) 学校全体へのインパクト：カウンセリングの成果だけでなく児童・生徒、保護者、関係教職員等の意識改革に大きく貢献した。
- (2) 教員へのインパクト：SCによる生徒指導上のコンサルテーションにより、教師の意識が変化し、適切な対応が取れるようになり、教師の心的負担が軽減した。教師とは異なった生徒理解の視点が提供されて生徒理解の幅が広がった。また校内研修などにより、教師のカウンセリングへの理解が深まった。
- (3) 保護者へのインパクト：教員以外の安心して相談出来る専門家がいることで、児童・生徒の相談だけでなく、保護者への相談も好評であった。保護者会などで講演して、思春期の子どもの発達理解に役立ち、保護者の養育能力の向上に寄与することができた。
- (4) 外部機関との連携：SCが連携先のさまざまな機関の情報を豊富に持っている場合、問題行動に適した連携機関の選択、連携機関とのパイプ役となれた。SCによる問題行動のアセスメントにより、学校・保護者・専門機関が連携して対応するのに役立った。また派遣校の周辺の学校からも相談が寄せられ、他校や地域との連携が深まった。この結果、問題行動に対する学校の意識が学校の中だけで対応しようとするよりも、積極的に家庭・関係機関と連携、協力する方向に変わってきた。

筆者の参加した中学校の場合には、村山の掲げる4つの成果について、どのような状況であったであろうか、検討しよう。

筆者の場合は、6月の初旬に全職員に対して、SCが来訪することを校長から伝えられ、発言の

機会を与えられた。ここで筆者は以下のような見解を表明した。

私は”課題のある児童・生徒とその関係者を対象に心理相談を実践し、研究して来た。私が実施する心理面接は原則的に、言葉による相互交流を手段とし、来談者の心に迫ろうとする。このような活動を心理面接とかカウンセリングという。今もし人の心を層構造に置き換えて、最上部を「感覚」とすれば、「次層」を「感情」とし、「三層」を「習慣・知識」、「四層」を「思考」、「五層」を「概念」として理解することができる。私の心理面接は、主として感覚・感情・習慣・知識(認知)に対し面接を通して接近する。ここでの層的理解に意識・無意識機制を組み込むことで、来談者をより総合的に理解して、来談者の課題解決を図ろうとする。

この見解が公立学校の教職員にとって、どれだけのインパクトとなったかどうか。校長の計らいで、自己紹介を兼ねた挨拶のなかで、児童・生徒への接近法とその特徴について表明した。

相談活動の具体的方法としては、校内に設置されている教育相談委員会の協力によって運営することになり、養護教諭が窓口となって、来談希望者のアポイントメントを取るようにした。保護者への広報活動については、校長の計らいで、保護者会を開催し、広報のチャンスを与えられた。60名余の参加者があった。外部機関との連携については、必要に応じて、連絡調整を図るべく心積もりをしていたが、そのチャンスはなかった。

表1 来談者延べ件数

	男子	女子	保護者	教師	計
6月	1	6	5	4	16
7月	1		7	3	11
8月			4	3	7
9月	3		11	7	21
10月	6		12	5	23
11月	6		11	6	23
12月	8		9	7	24
1月	1	2	15	3	21
2月	5	7	11	5	28
計	31	15	85	43	174

表2 来談者の主訴別集計

	生徒	保護者	教師	計
不登校気味	7	2	4	13
不登校	14	72	5	91
引きこもり		1	3	4
対人恐怖	10		21	31
対人関係	11			11
学習習慣		1	1	2
精神疾患			4	4
生徒指導	4		2	6
知的障害		9	3	12
計	46	85	43	174

### SCの相談活動の傾向とその意味について

表1は、約10か月間、週一回、一日8時間の勤務中の延べ来談者集計である。延べ来談者件数の一番多いのは保護者件数(49%)である。次いで教師の来談者件数(25%)となり、中学生の来談者件数(26%)は意外に少数となった。保護者の来談者が多数と言う結果になったのは養護教諭の意識もあり、養護教諭が積極的に保護者の来談動機の高揚に努力した結果と思う。次いで教師の来談が多く、中学生の来談者とほぼ同比率となった。教師の来談の殆どは飛び込み来談で、「あいて居ます

か?」と言って入室する教師が多かった。教師の相談内容の殆どは受け持ち生徒の課題についての相談であった。

表2は、174件の来談者の主訴別集計である。生徒の主訴で一番多かったのは不登校(30%)で、次いで対人関係(24%)である。保護者の来談も、生徒の主訴と同様に、不登校による来談(85%)が最も多かった。教師の相談では対人恐怖を主訴とする生徒の相談(49%)が多かった。これは特異なことで、来談教師が担当する生徒が対人恐怖を訴える生徒であり、その指導中で、生徒の症状がかなり重症であり、医師にかかりながらの登校で、当該生徒との面接過程についての検討を継続的に行ったためである。

### 真面目に、誠実に生活する家族に見る不登校生徒の事例から推察できる現代中学生の意識と行動

不登校生徒の両親の来談から、不登校生徒についての面接が始まる。

不登校生徒の来談の場合には、不登校中の来談者自身(生徒)が相談室に来談することは殆ど期待出来ない。結果として、不登校生徒の保護者の来談から始まることが多い。本事例の場合にも、両親の来談から相談が始まった。両親がそろって来談することから不登校相談が始まることは、両親と不登校生徒との関係の深さを象徴的に示すものであろうか。それは緊張関係であれ、複合関係であれ、最近の不登校生徒の相談に多く見られる現象である。両親が揃って来談するという事は、外面的には教育熱心で、子ども思いと考えられがちであるが、今後の相談面接過程に大きな影響があることをSCは覚知しなくてはならない。

相談室開室と同時に夫婦で来談する。夫婦で子どもの不登校のことで来談したと言う。夫婦で来談する動機は何なのか?注目したい。いろいろと推察されるが、<相当に動転されているのではないか。夫婦の人生では予想もしていないことが起こったのだろうか?いずれにしても相談室内には何らかの緊張感が漂う感じ>である。

<どんなことでしょうか?>と言うSCの問いがけに父親の方から発言して、「息子が学校に行かないのです」と言う。<それはご心配ですね>と返すと「はい、心配です。家でござろござろされていたのでは、こちらがやりきれません」と言う。これに対しSCが<そうですね。大きな子どもさんが家でござろござろしては大変ですね>と返す。父親が更に発言して「何か学校に行かせるためのいい方法はないかと思ひまして」と言う。<なるほど、息子さんを兎に角学校に行かせたい気持ちで一杯なのですね>と返す。「そうですね。何としても義務教育は受けさせなくてはと思いますし」<そうですね。親御さんとしては当然なことですね。少し経緯をお話し頂けますか>

2年生から不登校になり、現在も不登校中である。中学2年の新学期に保護者の転任に併せて他都市から移住した。転住・転校に続く中間試験の結果の不本意が引き金となって、学校に行かなくなったと言う。

不登校開始のきっかけは様々である。何でもがその理由になる。病気、いじめられ、試験、教師の叱責、友人関係の緊張、気分が悪い、風邪気味など何でもよい感じである。多くの保護者は、きっ

かけが除去されれば、不登校は解決すると感じ、不登校理由が無くなったのに依然として登校しないと訴える。不登校のきっかけを除くことで、不登校生徒の再登校を促進するための環境調整としては、あまり効果はない。例えば、いじめられたことが引き金となって不登校になった子どもの指導に、いじめを働いた子どもの居ない教室にクラス替えをしても、不登校は改善しない場合が多い。不登校生徒の相談活動では、初回面接から2～3回の面接過程中に事例についての判別が行われなくてはならない。判別の第1は、面接中の事例が、引き続き担当可能かどうかの検討である。第2は、これからの相談面接のための適切な面接方策の設定である。この判別作業を総称して判別見立てと言う。

「<そうですか。父様のお仕事の関係で、こちらにお住まいになり、転校したことで不登校になったのですか> 「そうです。まじめに親の言いつけもよく聞いてくれる、何の心配もなかった、良い子だったのです」 <そうですか。それはご心配ですね。これまで手のかからなかった良いさんが急に学校に行かなくなるなんて、予想もしていなかったのですね> 「そうなんです。全くの晴天の霹靂です」 <なるほど、そうですね。ところで、よろしければ学校に行かなくなった経緯について、お気持ちの範囲で、教えていただけますか？>

「家族は夫婦と子どもの5人家族。最近、下の子供が入院したりして、不登校の息子の世話がながしろになったのではないかと反省しています」と母親が言葉を添える。<そうですか。親御さんの気持ちの有り様が引き金になったのではないかと心配？> 「そんな感じもあるのですが、、、」

「最近、不登校中の息子が、親に黙って旅行し、何処に行っただのかと大騒ぎをしていたら、前住所の友人のところに行っていました。親に黙って、旅などに出たのは始めてだったのでびっくりしました」言う。<それは心配でしたね、でも一人旅が出来るくらい大きくなっているのですね> 「それがです。お金など殆ど持たないで、電車に乗ったと言う感じです。やりかたが下手ですね」と言って微笑む。

「息子は内気で、消極的で指示待型だと思っていたのが、急に電車に乗って旅行などしたので、驚ろきました」と言う。

「父親は合理的、論理的な人で、白黒をはっきりさせないと気のすまない性格です」と言う。来談者は中間テストが期待通りに出来なかったことを凄く気にしていて、「高校受験がダメになると言って落ち込んでいる」と言う。母親が「そんなに早く決めてしまわなくても、まだ大分先の話だと諭しても、自説を曲げようとしなさい」と言う。「最近、こちらに来て知りあった友人から電話があり、非常に喜んでいる」と言う。<そうですか。全くの孤独というのではないのですね。友達もいるのですね>と返すと、「そうですね。一人だけですけど」と言う。

「息子の性格は律儀で、真面目なところが、友人関係も緊張が見られやすいのを見ていて、自分の育て方が悪かったのではないかと反省しています」と言う。<そうですか、自分の育て方に何か手違いがあったのではないかと感じる>と返す。自分の子育てについて、詳細な再検討が続く。<そうですか。手塩にかけて育て、こうなったのだと思うとやるせないですね>と言うと、「そう

です,,」と言う。

多くの不登校生徒の相談の場合は、不登校生徒自身はなかなか来談しない。しかし、その保護者の来談が継続されるようにすることが大切である。この場合、母親は自分が不登校ではないのに、自分が継続面接を受けることに不安感を持つ場合がある。多くの場合<子どもさんが不登校で、一日中家にいると、いらいらされる場合があると思います。不安になられることもあると思います。そこでこれからは私と母様とでお子さんの再登校が出来るように、相談するというのはどうでしょうか>と提案し、母親と共同で子どもさんの不登校解決に努力しましょうと提案し、定期的に来談するように促す。

カウンセラーと保護者が共同で、来談者(子ども)の課題を解決するという方策を提案し、保護者とカウンセラーとが話し合っ、来談者の課題解決を図ろうとする方法は、広い意味での家族療法と言えるかもしれない。

現実に来談する母親の心に変化が生まれることで、家族内力動に変化が生まれ、家族内力動の変化が不登校中の子どもの心にも大きな変化を生む可能性がある。実際の面接過程は上記に示すように、相談に来た母様の気持ちに添い、母親の気持ちが少しでも希望が持てるような、将来が明るい方向に向くような面接を計画する。しかしその面接方法は指示や助言ではなく、来談中の母親が自分の能力と関心の中で気づくような面接を工夫する。従ってカウンセラーは、来談中の母親との面接の中で常に来談者からの感情や情動・無意識的動機を推察し、面接の進め方を工夫する。これが面接中の見立てである。カウンセラーが考えた見立ては面接中の母親に説明するのではなく、面接過程の中で、それが確認されるような面接過程を構成する。上記の面接エピソードはカウンセラーの見立てによって演出された面接過程そのものである。面接中の母親の心が軽くなり、希望を抱き、心に流れが起こるような面接が工夫されなくてはならない。

上記のような面接過程が8回(約2か月間)続いた。出口の見えない、しかし面接中の母親の面談動機の低減しない面接が継続される。

2か月が経過したころ、不登校経験のある母親と顔見知りとなり、不登校の生徒を持つ母親同士が、心情的に相通じるところとなり、交流が始まる。二人の母親は年齢的にも近く、家庭的にも類似性が高く、共通の話題が多かったことも幸いした。二人の不登校生徒の保護者(母親)を軸にして、SCと心の相談員と養護教諭を加えたグループカウンセリングを立ち上げた。爾来、個人面接とグループカウンセリングとが並行的に行われるようになった。

不登校中の保護者が寄り合っ話し合うと言う自助の会が学校内に出来ることを以前から期待していたSCの思いが的中し、小さな自助の会が発足した。本事例のような来談者の場合は、個別面接よりもグループで話し合う形式のカウンセリングの方が効果が大きいと期待した。不登校中の来談生徒に病理性を臭わすような場合には個別面接が重要であるが、本事例の様な発達モデルで対応できる場合には、グループカウンセリング技法による自助の会は大きく寄与するものと考えている。

グループカウンセリングでのSCの機能はグループメンバーの相互交流の流動化の促進を図るた

めに、メンバー全員の交流が促進するように、その雰囲気作りに努力した。醸成された雰囲気の中で、参加者は自由に、リラックスし、自己開示と自己理解が進むようにする。

グループでは、友人の母親の発言が多く、不登校生徒の母親の発言は少ない。友人の母親の不登校経験が少し早いと言うこともあり、経験の深い母親の話は不登校中の生徒の母親に取っては力強い支えとなった。一回のグループカウンセリングの継続時間は2時間とした。

不登校生徒の母親は「定期的に来談し、SCと面接して帰ると、家庭の雰囲気が変わると言う。「自分の気持ちが明るい感じがするし、子ども達も明るくなるし、最近では、息子が母親に話しかけてくるようになった」と言う。不登校中の生徒と母親は共に、「気張ることから開放された感じがする」と言う。「曜日が進むに連れて、火曜日効果(面接日)が薄れて、緊張感が高まる感じがする」と言う。「やはり一日中2人で家にいると、居心地が悪くなる感じだ」とも言う。<そうですね。その感じはよく理解できます>と返す。「母親も不登校中の息子も無口となり、息苦しい感じさえすると言う。火曜日が待ち遠しい感じ」と言う。<気分を変えるためにご両親だけの日帰り旅行を勧める>。「息子は高校野球を見に行った。明るい顔をして帰ってきた」と言う。「行かせて良かった」と言う。

上記の面接エピソードは長い面接過程の一端である。面接過程に潜む心理的交流は何だったのか。母親から変化がない、けだるい、気まずいなどの日常性が語られる。これに対しSCは励ますでもなく、出来る限り側にいて、共にあることを伝えながら、母親の気持ちを共感しながら、行動化が気持ちの流れを創ることを狙っている。長い面接過程の中での最も緊張感のある節目とは言えないだろうか。面接の初期には、来談者も話したいことが一杯で、話題が溢れる状況にあり、面接には弾みがあり、ダイナミックである。しかし相談面接は継続し、目に見える変化がなく、日常性が続く状況にある。SCの面接者としての腕の見せどころであろう。変化のない、動きのない、閉塞状況(?)の中での面接過程で、如何にして来談者の面接動機を維持し続けるか。これもSCの腕の見せどころとなる。来談者の側からすれば、これだけ面接を重ねるのに、何の変化も起こらない。この面接は間違いではないかという不安を生む。この時、担当のSCがどのような方略を工夫するかで大きな転機を迎える。一般化した表現をすれば、弛緩と緊張と力動性と転換と斬新性を如何に織り込むかではないかと思う。面接の初期では、多くの場合、来談者への受容・共感機能があれば、困り切っている来談者は自然とSCに心理的に接近し、信頼感を持つようになる。

来談者の課題の解決の糸口の見える面接終期には、SCと来談者との間に安定した治療関係が形成されているので、心理的相互交流は豊かとなり、面接過程に危機を感じることはまれである。この意味でSCの一番の腕の見せ場は、たるみ状況(変化の見られない、定常性の充満しがち)が忍び寄る面接中期への対処法の工夫であろう。具体的には、ここでのSCは、来談者の気持ちや感情を積極的に傾聴し、微妙な変化に注目し、その変化を来談者に的確な言葉(来談者の心に響く言葉)で伝えたり、新しい考えや、価値観を伝えたり、支持したり、場合によってはしっかりとholdingし

なくてはならない場合もある。また、退行化・acting outが見られる場合もある。細心の注意が求められる。

**夏休みが終わり、新学期が始まるも不登校は解消しない。**

日曜日は仏事で親戚が集まった。親戚の人達が教育問題について話し合っていた。息子もそれに参加して、中学生らしい発言をした。学校事情に詳しい叔父が居たので、息子も話しやすかったのだろう。息子の発言を聞いていると、父親の見解とよく似ているし、自説を曲げないところは父親そっくりだと感じたとのこと。「息子が何もしないでごろごろしている」と言うので「畑仕事か何か出来ないか？」と提案すると、「近くに乳製品を販売している店があり、アルバイトが出来るかも知れない」と言う。「配達をさせてもらっては」と勧める。「勧めてみる」と言う。今日も不登校中の息子に「相談に行こうか」と言ったが、「話すことがないと言って拒否した」とのこと。「母様がこんなに熱心に来談されていれば、きっと変化があります」とサポートする。「一緒に働いてみて、子供の実態を見て、驚くことが多い」と言う。「そうですね、豊かな社会の中で育てているので、このようなことがありますね、今回のアルバイトはその意味ではいいチャンスですね」とサポートする。「学校を休んでいるので、一人旅をさせようかと思う」と言う。「母の親戚が関東地区にいるので、一人旅をさせたい」と言う。「賛成する」

10月の半ば、不登校中の生徒(来談者)が始めて来談する。面接開始後、5ヵ月目に当たる。母親との計画的な面接が何らかの意味で影響があったのだろうか。本人が来談し、母親もうれしそうな感じ。「今日は、Aです」<今日は、来ましたね>「はい、旅行してきました」<そう！旅はどうでしたか>「人がいっぱい、車がなかなか動かず、大変でした」「ゲームセンターで遊ぼうということになったが、今度は入場券を買うのに長い行列で大変でした」と言う。「でも中に入ってから楽しかった。新しいタイプのゲームもあり、従兄弟と楽しく遊んだ」と言う。「新しいゲームを買ってほしいと父にねだったら、やっと許しがでたので、うれしい」と言う。「でも買うのは自分の蓄えたお金で買うのだけど、許しがでたのが不思議な感じだ」と言う。「そう！、それはよかった、これまではゲームを買うことも父に許しを得にくかった感じだったのが、最近は言えるようになったのです」と返す。来談者が新しいゲームを持参していると言うので、テレビを借りてきて、ゲームをする。殆どSCが来談者に教えてもらうと言う感じになる。これは効果的で来談者の目は輝き明るさを増す。見違えるほどの元気である。エネルギーも上昇する。母親も来談者のこの変化をみて、びっくりする。暫くゲームに興じた後で、来談者がSCに対して、相談があると言う。「どうぞ」と言う。「弟の持っているゲームソフトを借りたいのだが、なかなか口に出せない」と言う。「何で？」と返すと、「人にものを借りることに拘りがある」と言う。「そう、人に物を借りることも大切な仕事ですね」<上手に交渉して、借りては？>と勧めると「交渉する」と言い出す。「じっくりと交渉するコツを見つけることが大切」と助言する。

来談者が遂に相談室まで足を運ぶようになる。母親との粘り強い面接が何らかの意味で効果を示

したのだろうか。来談者との関係形成もゲームを小道具に利用できたので、スムーズに形成できた。来談者にSCが教えを受けるという関係から相談面接に入することは有益な技法であり、活用しやすい感じである。別の不登校事例でも、ゲームを媒介として相談面接に導入できた。

上記面接過程は面接中期にあることもあり、「たるみ状況」にある。アルバイトを勧めたり、旅行を勧めたりして、面接過程(生活状況を含む)に刺激を与えている。面接後半では、来談者の行動にわずかではあるが、変化の兆しが見え始めている。

10月後半の相談日に両親と来談者の3名で来談する。

3人で来談することの意味について考える。来談者が来談し、母親が予定通りに相談に行くことに対して、父親も関心を持つようになり、家族での来談動機が高まったものと推察する。ゲームを持ってくる。暫くゲームをする。声が大きくなり、言葉が流暢で、元気な少年に変わる。〈相談室に来談しない日は来談者は何をしているのだろうか?〉

朝起きて、乳製品を配達する。朝食はパンを食べることが多い。食事は3度摂っている。日曜日には、父親と野球について話し合う。野球の話は通じ合うところが多いと言う。週が代わって、月曜日は学校に来る。養護の先生に会う。保健室に暫く居て帰る。保健室登校が続いている。父親が発言し、「自分が絶対と思い、自分を子どもに押しつけてきたが、これがまずかったと分かった。」と言う。自分(父親)の家族文化には、一徹者が多く、自分の家族全体に伝統的にある文化だ」と言う。そのために、自分は思い込んだら、突き進むと言う性格だが、調整できるようになるかどうか心配だ」と言う。「人の言うことには耳を貸さない夫が、ここに(相談室)は来る気になるので不思議だ」と母親が付け加える。父親は側で、にこにこしている。

この日の面接は本事例の大きな山場を乗り越えた感じがした。特に父親の変化は著しく、自分の生き方について深く洞察する。来談し続けたのは母親であったが、その結果として、父親の洞察が進んだ。毎週一回の割合で、相談室に来談する母親、最近は息子までもが相談室に来るようになった状況の変化に、父親が変化したのであろうか。事態が大きく変わると言うわけではないが、家族全体が質的に変化しつつあるものと考える。

### 高原状態にある面接過程(1)

夫は自分の生き方を進むことにしたと言っている。何時まで続きますか?と母親が笑っている。友人が息子に話しに来ないかと言う。行かせて見ようと考えている。以前、不登校だった生徒で今は学校に復帰している友人が家に来てくれる。母親同士も交流している。〈これは大切なことですよと勤める。

今度は高校受験がうまくいくか心配だと母親は次の心配を持ち、来談者の将来が心配だ。中学浪人をするのではないかと思うと言う。思うことが否定的なことばかりですよと言う。〈希望を持って暮らすことは難しいですね〉そうです。いろんな人生があると思うのに、どうしても否定的な方向にばかり考えます。〈そうですか〉苦しいです。

面接を契約して、かなりの面接回数を重ねている。面接が軌道に乗り、SCと来談者間の相互交流が豊かになり、深い自己開示が行われるようになる。〈何でも話のできる関係〉が形成される。深い分析と洞察が始まり、会話はゆったりと、伸びやかに進行する。SCが一番に敏感となる時期である。来談者のちょっとした変化にも敏感に反応し、反応結果をできるだけ正確に来談者に伝える努力と工夫を必要とする時期である。面接効果が最も鋭敏に表現される時期である。

### グループカウンセリングの実施

来談者の母親(A)と来談者(A1)と来談者の友人(B1)とその母親(B)と、心の相談員(T)とSCとでグループカウンセリングに入る。

初めはゲームをする。A1は関心を示すが、B1は傍観している。SCからB1を誘ってみるが乗ってこない。Tがゲームをよく知っていて、ゲームについて解説をする。B1がTと会話を交わすようになる。ゲームが終わり4人で話し合いが始まる。A1もB1も気持ちや和らいできて、色々と話し始める。B1の父親は酒が好きだと言う。これに対してA1の父親は殆ど酒は飲まない、飲んでも缶ビール一本程度とのこと。B1が発言して、母も酒好きで、夫婦共に飲んでいると言う。A1が発言して、家では父親が支配的で、言い出したら譲らない、家の支配者だと言う。Aは何も言わない。B1はC(子ども達が遊ぶ所らしい)に行つて写真を見ていると言う。A1はそんなことは知らないし、見たこともないと言う。A1自身は写真に関心はない、自分は遅れているのだと言う。A1が発言して自分は性格的に父親に似ていると言う。B1が東京ディズニーランドに行きたいと言うが、A1は余り興味はない。A1は自然が好きで、Bは人間好きと言う。また時を見てグループカウンセリングを実施することを契約する。

A1が性格的に父親に類似しているという発見と発言は大きな意味がある。家族文化の深さと重厚さを意識化することは、これからのA1の人生に大きく影響するものと推察できる。〈話し合うことで性格分析とその統合化が行われることは思春期の子どもにとって非常に重要なことである〉思春期最中にある中学生が集つて交流をすることは、彼らの人格形成にとっては計り知れない機能であり、機会となる。性格再編成期にある中学生がこれというはっきりした目的を持たないで、たわいもない交流を重ねることは彼らの人格形成にとっては大切なことである。中学生同士が心に漂う何かについて語りあうことは、自己開示の機会となり、更には自己を見つめ直すチャンスとなり、自己理解を深めることになる。

中学生が、自分の趣味、家庭のこと、両親の生き方、学校での生活の仕方などについて、自然の流れの中で語り合う時、自己の再発見の機会となる。

ここでのグループカウンセリングの考え方は、非構成的で、「これから2時間、話したいことを話したいだけ語り合う場としたい」と言うオリエンテーションでグループカウンセリングが開始される。初めはメンバーが生徒だけでもないし、教師・カウンセラーなども参加しているので、ぎこちない雰囲気が漲ることもある。この時、老練な教師などが発言して、何時の間にか質疑応答の場面

になる場合もある。このような時にカウンセラーは老練な先生による質疑応答に流れつつある空気を変更するような発言をする。〈今〇〇先生の発言に対して、貴方(例えばA1)はT先生の発言に対し、どんな感じを受けますか。感じを聞かせてくれませんか〉と介入する。するとA1が発言して、「そうですね。これまでもよく聞いた感じがする」と言う。〈そうですか、よく聞いた感じがする。B1君はどんな感じですか〉B1は無言のまま、「さあ!」と発言する。カウンセラーのこの発言で、T先生は発言を控える結果となる。暫く静寂が来る。静寂を破るように、B1の母親が発言し「B1さん、気持ちを言ってみては!」と発言を促す。するとカウンセラーがB1の母親に向けて「母様は子どもさんが何も言わないので気になりますか?」と発言する。B1の母親が発言して「はい!日頃は直ぐに口出しするのに、今日は発言が少ないので、私が発言しました」〈そうですか、母様が黙っておれなかったのですね〉H1の母親が発言して、「私も言いたくなりますね」と言う。

このようなやりかたで、参加者が「今、感じている心のまま」を語れるような雰囲気を作るようにする。「here and now」「今、ここで」の感じを表明出来やすい雰囲気や相互交流関係を促進することで、参加者の自己開示、自己理解、自己の再発見、自己の特異性の発見を促すようにする。

### 高原状態での面接経過(2)

家の中で生活することが多いためか最近肥満気味である。先日、母親は友人の所に行く。友人の家族は母親中心の家族で、夫は静かな家庭だと言う。A家では父親が中心であるからと言う。〈コミュニケーションが大切で、話し合っていると交流が深くなる〉と言う。来談者と弟がゲームのことで喧嘩となった。〈この争いに母親は判定者として参加するのではなく、交流者として参加してほしい〉と言う。〈母様は自分の意見を言い、参加することが大切〉と言う。

来談者自身が保健室に来た。同学年の女子生徒が保健室に来て、珍しがっているいろと話かけてきたので、緊張したとのこと。

「この間、子どもと話し合っている内に険しい関係になったが、さらに話し合っていたら、気持ちが楽になった。やはり話し合うことが大切なのですね」という。「話し合うと安心する。話し合うことの意味が分かってきた」と言う。

担任が来室して、来談者の進学について話す。A高校は無理だが、B高校なら可能だという。来談者も高校に行く気持になってくれたと母親も言う。

親子が話し合えるという発言は保護者面接では重要なキーワードとなる。親子が話し合えるという発言は言葉通りの話し合えるのではなく、通じ合えると言うことであり、潜在的機能障害にあった母子関係に心理的流動が始まったことを意味する。母子の会話は多くの場合、機能障害が発生しやすい状況にある。機能障害にある母子の会話、ご飯まだ!〈出来ましたよ!〉黙ってテーブルについて、黙々と食べる。たまりかねた母親が、〈今日は学校どうだった!〉普通!〈普通と言うのは〉普通とは普通!〈それだけではわからんよ!〉普通と言ったら普通だよ!〈もっと詳しくいろいろと話しなさいよ!〉話すことはない!

母親が遂にキレて、〈あんだ何時もそうなんだから、父さん何とかしなさいよ〉  
父親は沈黙！！

#### 母親と来談者との同席面接：

同級生の修学旅行があり、同級生が学内にいない。来談者と母親で来談する。来談者が自分の意見をはっきりと表明できるようになる。〈あなたの気持ちをしっかり発言することはうれしいです〉と返すと、にやとして、そうですねと言う。「受験勉強のために家庭教師を雇ってみようかと考えていたが、派遣教師と面接して、意見が合わないので断ることにした」と言う。「自分なりに生きてゆきたいのだ」と言う。〈自己決定を軸に生きようとしているのですね〉と返す。顔付きが引き締まってきた感じがする。母親がときおり発言する。不登校を続けていた来談者が学校に行くようになる。

#### 〈グループカウンセリング〉

A1, B1, C1の母親3名と心の相談員(T), SCの5名で実施

Aがコーヒーを持参する。Bの子どもが楽器を買ってほしいと言うので、買いに行ったとのこと。Aが発言を続けて、最近では来談者がよくなったので、気持ちがよいと言う。顔色もよくなった感じと言う。Bがリードして、3名で話が盛り上がる。安心感と信頼感がみなぎってくる。参加者の自己開示がすすむ。

ここでのグループカウンセリングは不登校の経験者ということで出来たグループであるが、同じ課題の経験者であるため、メンバー間の心理的流動性が最高に達している。TもSCも介入の必要はない。流動性が高く、密度の高い力動性が表現される。特にA1が登校出来始めたことで、A1の母親の気持ちの変化が大きく貢献しているところがある。

#### 来談者の母親来談

今週から来談者が学校に行くようになった。別室で授業を受けている。この間、父親との間で、いさかいが起り、家出をして、どこに行ったかわからなくなった。心配して、両親で探したが見つからなかった。待っていたら帰ってきた。安心したとのこと。

#### 来談者の母親来談

学校に来るといって学校まで来たが、途中で気分が変わって、車の中で待っている。父親は子供の教育に口出しをしなくなった。

#### 来談者の担任来談

進路について相談する。来談者の現在の状況ではM東高校なら合格可能だろうと。これに対し来談者のプライドが許さない感じ。

### 来談者の母親来談

最近は両親とクライアントがよく話合えるようになった。以前と比べると驚くほどだと言う。先日は父親と来談者が二人で魚釣りに行った。

夜遅くなるまで海岸で二人で話し合ったとのこと。来談者がM高校に行くという気持ちになれないで居る。心配だと言う。

### 来談者とその母親来談

午前7時から相談室に来て、カウンセラーが来るのを待っていた。教頭先生の計らいで、相談室でゲームをしながら、時間を過ごしていたとのこと。ゲームのキャラクターについて語り合いながらの面接が続く。ゲームはクライアントの得意世界であるため、SCに対して指導的であり、面接での交流度も高く、濃厚である。

### 来談者の母親来談

父親と来談者が激論になったと言う。来談者が泣きながら父親に反論した。来談者がこんなにも激しく父親に抵抗したのは初めてだと言う。

父と息子(来談者)が討論できるようになったことで、うれしいと言う。来談者の言うことの方が筋が通っていると言う。

### 来談者の担任来談

進路の相談が行われる。来談者の口から一番はA市のF高校だと言う。二番にM高校、三番がM東高校という。これに対して、担任はM東高校が適当だと言う。

### <グループカウンセリング>

A1, B1, C1の母親3名と心の相談員(T)、養護教諭(Y)、SCの6名で実施

グループカウンセリング開始。コーヒーを嗜みながらの話し合いとなる。Tがしんどい話をする。子どもと一日中家の中にいるのはしんどいことだと言う。Bが子どもと向き合うことはしんどいことだと言う。長い目で待つことが大切だと言う。Aが発言して、私もできるだけ気分転換して、旅行に行ったり、里に帰ったりして気持ちを切り替えるようにしていると言う。ここに相談に来るようになって、待つことの大切さを知ったと言う。夫婦関係の豊かな交流も大切だと言う。夫婦が話し合うと、気分もよくなるし、感じもよくなると言う。気分が楽になると、ものがよく見えるような気がすると言う。結婚して10数年、夫婦関係が惰性に流れていたが、考える必要があると言う。Bの子どもは外見が気になる性格で、鏡の前に座っていると言う。服装も気にするのだと言う。Aの子どもはまだ鏡には向かわないし、服装にも関心がない、思春期の発育には個人差が大きいのだという話になる。Cは発言しないで、にっこりしている。

グループカウンセリングで話し合われたこと的一端で、プライバシーに関わる部分を除いた。内容紹介からでも解るように、グループカウンセリングの集団力動の持つ治癒力すばらしい。「子どもと対面して、向き合うことのしんどさ、しかし、このしんどさから逃げないことの大切さをメンバー達は確認しあっている」「長い目で交流しながら待つことの大切さが自然の会話の中に湧出」する。

「結婚して十数年、夫婦関係の再編成の大切さ」についても語られる。思春期に示される「鏡注視現象」についても話し合われる。子ども達の思春期現象の詳細な観察結果についての情報交換のできる母親は、その現象に対して、ゆとりと時間をかけて対応できる。参加した母親達の前進を見ることができると言える。

#### 来談者の母親来談

朝が寒いので牛乳配達をむずかるが、元気を付けて、つれだしている。〈大切です〉と言う。A市の知人がいろいろと高校入試について情報を入れてくれるとのこと。A市の公立高校に行きたいと言っている。しかし、これは無理だと思うと言う。〈簡単に否定をしないで、出来るだけ多くの体験を通して知るようにしたい〉と伝える。〈今、進路についてのことが一番の悩み時だから、支援してほしい〉と言う。気分が楽になったと言って帰る。

#### 不登校生A1, B1の二人が来談

心の相談員とSCの4名でグループカウンセリングに入る。B1, A1の同席した初めてのグループカウンセリングである。アイドルの話。心の相談員は物知りで、対応がうまく話が弾む。音楽の話になり、B1とA1で、話が盛り上がる。特にB1は音楽についての造詣が深い。A1も音楽事情に詳しい。有意義な、1時間30分であった。

不登校生徒の2人が同じ部屋で、自由に、リラックスして「心の中に湧出」することを語り合うことで、彼らの人格形成に計り知れない影響がある。「生物として誕生したヒトはジンカン(人間)にありて揉まれ揉まれて、人間(性格形成)となる」と言う。「可愛い子には旅をさせよ」と言う古諺があるように、子どもが成長のためには関係の中で揉まれなくてはならない。二人以上の若者が時間を掛けて語り合うことは人間(性格)形成の第一歩である。

#### 来談者の母親来談

休みを利用して、以前通学していたA市の中学の先生に会ってきた。先生がいろいろと忠告してくれた。来談者も感動して聞いていた。先生の指導の骨子はあまり勉強のみに打ち込まないで、遊びながら生活しないと神経の病になると言ったとのこと。来談者の気分が変わったのか、A市の高校受験を止めてM市の高校に行くと言いだしたとのこと。その気になって、塾にも通いだしたとのこと。何か決心がついた感じだと言う。夫婦関係の話になり、[夫のように個性がつよく、自分の意見を曲げない場合にはどうしたらいいのだろうか?]という。〈夫との間に距離をとったり、接近したりする弾力性のある関係はどうだろうか〉と提案する。〈近づきすぎても確執がたえないので、確執の激しいときには距離をとり、関係がいいときには、接近することはどうでしょう〉と提案する。〈結論をだすのではなく、話し合う過程が大切だ〉と提案する。〈我慢してつきあうのではなく、お互いの特徴点をうまく組み合わせることで付き合うことが大切だ〉と言う。

### 来談者と母親との同席来談

来談者と母親と2人で来談する。服装もきちんとして、鞆を抱いている。担任と相談してM高校が第一で、N高校が次で第三がA市の高校のどこかにすることにしたと言う。来談者はM高校がいまのところ、最有力だと言う。来談者から発言して、最近、父がおとなしくなり、寂しそうにしていると言うので、なぜと聞くに、自分と父との関係に心理的な距離ができて来て、かつての威厳が保てなくなった感じだと言う。来談者自身もはっきりと発言して、自分の意見を主張することができるようになったとのこと。母親も発言して、来談者といろいろと話すことが出来るようになったと言う。いろいろとやっている内に一日一日が経過している感じがするとのこと。昨日の午後、この相談室で、B1, C1, A1の母親3人で話し合ったと言う。楽しい話し合いになったと言う。特にC1がふさぎ込んでいたのが、気分がよくなったとのこと。

SCが勤務しない日で、相談室の空いている時間帯を活用して3人の不登校にかかわりのある母親が集って話し合うと言う「自助の会」の活動である。SCもかねてより推進してきたことであり、ようやくその芽を見ることができた。

今後の更なる発展を期待したい。ここで大切なことは、意識的・意図的に作り上げると言うことよりも、自然の流れの中で、自然発生的に形成することを期待する。類似体験者同士がファシリテーターを交えて語り合うことがより生産的であり、有効である。

### 来談者の母親来談

新年の挨拶来談者が父親と二人で、父の里に挨拶に行ったと言う。最近、父と来談者がよく話し合うようになった。この間、父と来談者とが家庭経済のことで論争した。＜側にいて交流しながら、交流を絶やさないで、待つことにしましょう＞という。＜話し合ってください。結果よりも、過程を大切にしてほしいです＞と言う。

#### <グループカウンセリング>

A1, B1, C1の母親とSCの4名でグループカウンセリングを実施

子どもの育て方について熱心な話し合いが続く。カウンセラーの入る余地もないくらいの熱心さである。

### 来談者の母親来談

来談者と共に車で校門まできているが、相談室までは来ない。母親と相談開始。

M高校に受験すること。試験日が近いので不安だとのこと。来談者のいらいらに母親が振り回されると言う。＜そうですね。しんどいですね。来談者のいらいらを聴いてほしい＞と言う。頷く。

### 来談者の母親来談

来談者は卒業文集の原稿を持って登校したが、相談室には顔を出さない。卒業文集の原稿には自分のこれまでの人生について語っていたとのこと。最近、あまり登校しないが、町をよく歩かし、自転車で遠くまで行っている。来談者は父親似だと言う。＜父親とよく似ていると言うことは、う

れしいことでもありますね>と返す。それを聞いた母親はにこっとして、そうですねと言う。夫は仕事はよくしてくれますし、<そうですね。貴方の愛したかたですから>うっふ,,,。高校に行くようになってもついてゆけるでしょうか<そうですね、母様はもう先のことが心配なのですね>そうです。<心配されるのは母様ですから当然ですけど、その時になって考えるという手もありますね>そうですね。取り越し苦労ですな<取り越し苦労も程度ものかもしれませんね>このままの状況がまだまだ続くのでしょうか<そうですね、学校に行ったり行かなかったりがもうしばらく続くと考えておられたほうがいいかも知れません。そういう腹づもりで子どもさんに関わって頂くというのはどうでしょうか>そうですね。<子どもさんは思春期の最中ですから、もんもんとした日がいましばらく続くように思うのですけど>

#### <グループカウンセリング>

A1, B1, C1の保護者と心の相談員と養護教諭とSCの6名で実施

午後2時から午後4時までの2時間の実施。数度のグループ経験があるために、はじめからなめらかな会話が続く。B1がリードする。中学生の鏡眺めの話になる。A1の母親が発言して、うちの子どもは余り鏡を見なくなったと言う。Tも発言し、うちの子どもも鏡を見ないと言う。するとB1だけが鏡に関心があるのだろうかと言う。<これからは家庭も学校も大きく変わらなくてはならない、変わることが求められています>と発言する。家庭の現状分析が始まる。夫が居ると居ないでは、気持ちの上に大きな変化があると言う。夫がカレンダーの上に日程を丁寧に書くのでそれを見て、今日は夫が居ないと思うと気持ちが楽になると言う。別の母親はうちの夫は定刻に出勤し定刻に帰宅すると言う。連日寸分の狂いもないと言う。別の母親は、うちのは夜遅くまで仕事を続けていると言う。暇さえあればパソコンに向かっているとのこと。

家に子どもが少ないことは人間関係の訓練には致命傷だと言う話になる。2人同胞というのは人間関係の形成には不都合だと言う。二人が交流して何かが起こると、そこで対立か分別かの二種類しか決めようがない、これでは人間関係には成らない。人間関係は3人以上がいて、対立があった時に3人目がどちらに同調するかで、はじめて人間関係があるといえるのだと言う。<なるほど>。三角関係こそ、生きた人間関係だということになる。昭和59年に結婚して60年と61年に子どもを出産して、今同じ中学にいるということに同感し、お互いが居住地は違っても、同じ人生をスタートさせたのですねと共鳴が続く。

#### 来談者の母親来談

変化のない生活が続いている。高校に合格はしたものの今後は心配だとのこと。<心配事は先取りしないで、その時になって考えるというのはどうでしょうか>と返す。今朝も配達に行くように勧めるも行こうとしないので、立腹して行くようにと強く言うと、ついてきたとのこと。無理に言いつけてもいいものかと心配だと言う。<それは貴方の気持ちだから伝えてよいのではないかと伝える。<しっかりと伝えることが大切だ>と言う。

先日父親が来談者と共にサッカー見物に行こうと言うも来談者は反抗して行かなかった。しかし、父親は前よりははるかに子どもへの理解が深くなったと言う。

### 来談者の母親来談

定刻通り来談する。最近、来談者は口数が多くなり、よく話すようになってきた。自分の部屋が欲しい、パソコンとテレビが欲しいと言う。どんな風に対応しようかと言う。＜子どもが自己主張するようになったことは大切な変化ではないか＞と対応する。これまでは父親に抑制されていたが、現在はある程度自由に発言するようになったと言う。パソコンを買いたいと言いだして、家電販売店に見物にゆく。○万円程度のを店員は勧める。

### 引用・参考文献

- 村山 正治・山本和郎 1998 スクールカウンセラー—その理論と展望— ミネルヴァ書房
- 中川 賢幸 1990 登校拒否を学ぶ 美巧社
- 田畑 元春・水野善親 1997 子どもの死と再生—いじめ・不登校・子どもの暴力 溪水社
- 村山 正治 2001 新しいスクールカウンセラー制度の動向と課題  
臨床心理学 vol.1 no2 pp137-141
- 鶴養 美昭 2001 スクールカウンセラーと教員との連携をどう進めるか  
臨床心理学 vol.1 no2 pp147-152